

## 大分県立看護科学大学 学生交流プログラム 2014

韓国 ソウル 滞在記 (2014年8月17日-8月23日)



私たちは韓国ソウル大学を訪問し看護学生と交流しました。  
韓国の医療・福祉施設で学んだこと・感想を紹介します。

滞在1日目 (2014年8月17日 (日))

大分での楽しかった1週間の思い出しながら、インチョン空港に足を踏み入れました。ターミナルから出ると、SNUの学生が、かわいい看板を挙げて私たちを迎えてくれました。大分で過ごした1週間は非常に充実し、楽しいものでSNUの学生とも大変仲良くなることができたため、私たちはこの日を心待ちにしていました。「久しぶりに会うから話せるかな…」という不安もありましたが、彼女たちに会った瞬間に、1ヶ月の間隔を感じさせないほど楽しく話すことができ、写真もたくさん撮りました。



空港からバスに乗って1時間ほどで大学寮につきました。看護学科とその寮はソウル大学病院に併設されており、その敷地の広さに驚きました。

寮に一度荷物を置いたあと、待ちに待った夕食の時間でした。今日の夕食は中華で、麻婆豆腐、かにチャーハン、きのこチャーハンの3つの中から選ぶというものでした。私を含む多くの学生が麻婆豆腐を頼みました。ところが、その麻婆豆腐は日本では食べたことのないような辛さでした。水なしでは食べることが出来ず、まさに口から火が出るような辛さ。みんなでヒーヒー言いながら食べました。また、本場のキムチも初めて口にしてみました。キムチも大変辛かったです。日本人の私たちは辛さに音を上げていましたが、韓国の学生たちにとっては普通の辛さのようでした。

また、日本語が非常に上手な SNU の 4 年生が、通訳としてきてくれました。高校まで日本にいたそうで日本語を大変流暢に話される方です。SNU の学生と私たちは、基本的には英語でコミュニケーションを図りますが、伝えきれない部分も多くあります。そんなとき、通訳の方がいると非常に助かります。これからの 1 週間私たちと SNU の学生の架け橋になってくださる方です。

新しい仲間も加わり、大変辛い夕食という韓国らしい刺激的なスタートをきることができました。

学部 3 年次生 M. N

滞在 2 日目 (2014 年 8 月 18 日 (月))

---

まず初めに、ソウル大学でウェルカムセレモニーを開いていただきました。ソウル大学の教授や学生と自己紹介をし合い、沢山の歓迎の言葉をかけていただきました。

次に、大学内の見学を行いました。最初に訪れたのは、講義室でとても明るく、階段状になっており、講義を快適に受けられる環境だと感じました。次に、博物館を見学しました。ここはソウル大学が 100 周年の時に作られた施設だという事で、ソウル大学 100 年の歴史と看護の歴史についての資料が保管されていました。又、子どもを対象として看護という仕事はどのようなものかを示しているコーナーがあり、看護について子ども達が学べる場所でもありました。続いて、実習室の見学をさせていただきました。実習室は 2 つあり、2 年生はベッドが沢山並んでいる部屋で学生が 2 人 1 組になって、患者役と看護師役に分かれて実習を行うそうです。3、4 年生はナースセンターといくつかの個室に分かれている実習室を使用していました。個室には、それぞれ、病状、年齢や性別の違うモデルが用意されており、手術室、分娩室や ICU がありました。各部屋のモデルは、日本のものとは違い、実際に血圧や脈拍を測ったり、体温を測ることが出来るもの、さらに実際に分娩の進行を観察できるもの、チアノーゼの観察ができるものがありました。モデルの病態は教員によって変化させられ、より実践に近い実習を行う事が出来ます。変化する現状にどう対応するかという事も大切な学習だと話していました。個室で行っている実技は、カメラを通して他の学生も見学する事が出来、行った処置について、お互いに討論して学びを深めます。また、実習室とは別に学生が自由に実技を練習できるスペースがあり、基本的な技術の習得に役立っています。ソウル大学では 3 年生から、病棟での実習に臨むそうで、月曜日と火曜日は大学での講義、水曜日、木曜日と金曜日は病棟実習という様に、週 3 日ずつの実習を行っているそうです。

続いて、昼食時にウェルカムパーティーを開いていただきました。韓国の伝統的な楽器の演奏とダンスを見せていただき、こちらでも沢山の歓迎を受けました。学生生活について、お話をしながら楽しく食事をする事が



出来ました。ソウル大学の学生さんは、とても優しく、交流を通して仲を深めることが出来たと感じました。

午後からは、ソウル大学病院ヘルスケアシステムカンナムセンターを見学しました。ここは、検査センターで、多くの最先端機器であらゆる検査を受けることが出来ます。ここで受けた検査のデータは提携している施設で共有することが出来ます。日本と違い、施設に宿泊することは出来ず、患者さんは家で食事の自己管理を行って検査に臨みます。この施設で働いている職種は、医師や看護師などの病院と同じで多くのスタッフが健康に関する相談に乗るシステムが出来ていました。又、検査を受けて、今後の注意や食事の指導も行っており、予防的支援に努めていました。

学部3年次生 S.K

### 滞在3日目（2014年8月19日（火））

---

午前中は、ソウル大学のメインキャンパスに行きました。SSA という海外の人が来た際の案内役である学生が2名つき、日本語と英語で学内を紹介してくれました。経済学や社会学、教育学、建築学、アジア文化学、法学、農学、美術など、いくつもの大学が集まってできており、学生は約2万人とのことでした。店や薬局も敷地内にあり、ソウル大学のお土産を私たちも買いました。チャハ池や王が研究のために作った建物も残されており、歴史が大事にされていると感じました。また、SNUのシンボルは鶴で、空に飛びたてる、世界で飛躍する、という意味が込められているそうです。

午後からは、SongPaの保健所に行きました。韓国には16の区、254の保健所があり、都市型と田舎型に分かれています。医療機関の少ない田舎型では、特別な形の保健所となっているそうです。保健所は、プライマリー医療や家庭訪問、社会復帰に向けた運動、データ管理、環境（衛生面）管理、知識不足・貧困層の住民の管理・指導、子どもへの予防接種・親の教室、脳関連の病気の管理などを行っているとのことでした。韓国ではデータ管理が進んでいるため、予防接種の時期がメールで知らされたり、アプリを使って自分の情報をスマートフォンで確認でき、処方自ら医師に伝えたりできるようになっていました。

SongPa 地区では、女性の人口が多いことや、女性の喫煙・飲酒が多いことから、女性の健康教室や妊婦・褥婦に向けた活動が多くされているという印象を受けました。健康教室への参加者は、参加していない他の方にも教えるための活動を行っているそうです。大分は高齢化率が高いため、実習では高齢化に向けた取り組みを多く見てきましたが、SongPa 地区の高齢化率は増加傾向にあるものの8%ほどのことで、高齢者に向けた取り組みは各検査の実施（希望者）や高血圧や肥満に対する管理と少なく感じました。



その後、保健所が管理している褥婦の為のホテルを見学させていただきました。韓国では、正常分娩をされた褥婦は3-4日で退院するため、自身と児の健康管理のために退院後はホテルで過ごすことが多いそうです。ホテルには医療スタッフが50名程度勤務しており、入院フロアでは看護師が児にミルクをあげている様子も見られました。このホテルでは、妊婦のための教室も開かれており、フィットネスクラブや料理教室などが実施されていました。1年に250程のプログラムを行っており、父親や祖父母への教育も行うとのことでした。女性を元気にして、家族も一緒に元気になる、という目標のもと、取り組みが行われていました。日本では、ホテルへ退院するというのを聞いたことがなかったため、驚きましたが、ここで健康管理もされ、自宅へ戻った際について指導もされるとのことで、安心して子育てができるための準備機関として良い役割を果たしていると感じました。

学部4年次生 C.H

#### 滞在4日目（2014年8月20日（水））

本日は、2つの施設に行きました。

まず、韓服を着て茶道を行い、韓国の文化を体験させていただきました。韓国の伝統的なお菓子作りを行ったり、韓服の歴史を見ることができ博物館を見せていただき、韓国の文化に触れることが出来ました。男性が着る韓服はチマ・パジ、女性のもはチマ・チョゴリという名前です、先生も含めて全員で着させてもらったので、とても楽しく、良い思い出になりました。



次に、アサン病院という韓国で最も大きい病院を見学させていただきました。この病院には2700床あり、外来患者だけでも1日に11,027名の方が来るということに驚きました。このため病院はとても広く、患者さんやその家族、スタッフの方がたくさん行き交っており、まるで病院ではないような雰囲気であったことが印象的でした。この病院の理念として、「貧しい人を助ける」というものがあり、海外でのボランティア活動や地域の高齢者との触れ合い、無料診療事業を行っているということが印象的でした。

また、看護部の理念として「世界で最も良い看護を提供する」というものがあり、このため、毎年新人看護師のために10年の教育プログラムを準備しているということにも驚きました。その他に、定期的に試験を受けているそうです。看護部で働いている方には、安全かつ効果の高い診療を行うために存在する臨床専門看護師や認定看護師も働いているということでした。また、一般の看護師はチャンピオン看護師になることができ、糖尿病、創傷・腸瘻、疼痛に関してより良いケアを行うことができるそうです。このようにステップアップするために様々な制度を取り入れていることが印象的でした。

日本と違う点として1つ目に診療科が細分化されていること、2つ目に看護師は患者さんの身の周りの世話をを行うことはなく、服薬や治療方法の管理を行っているということがありました。このため看護師はより医療的な知識が求められていると感じました。また、採血室や注射室などといったように診療科は細分化されているために各部署のスタッフはより深く知識を得て医療や看護を提供する必要があると感じました。日本と違う点を実際に見て知ることができ、ソウル大学の生徒達とも看護について話をすることができたため、将来のことを考える良いきっかけとなり、とても良い経験になりました。

学部3年次生 E. A

滞在5日目 (2014年8月21日 (木))

---

### ナーシングホーム GREEN HILL 見学

GREEN HILLは15年前に韓国で初めて作られたNsによるケアを行う長期療養型施設であり、個人で運営されている(日本でいうデイケア・デイサービス・訪問サービスを統合で行う施設)。施設長はとても優しくそうな方で、一緒に施設内を回って説明して下さった。施設長はイギリスで見たナーシングホームを見て、看護師学校に通い、10年勤務した後、施設を設立した。

施設内はきれいで個室や4人部屋など状態に合わせて部屋が準備されていた。日本語の通訳をしていたという高齢者もおられ、少しお話をすることもできた。施設ではアロマを用いて排泄のケアを行うなど細やかな配慮がなされていた。高齢者の方も、施設でのケアは最高だと話されており、施設長と高齢者の方との距離もとても近く感じた。

施設長は私達にも10年ほど働いたあとは、老健などの地域に根付いた施設を作ってほしいと話されていた。韓国での施設見学のなかでも、私の考える看護「その人らしさ」を大切にしたい看護が行われている施設であると感じた。

### 光化門

光化門は韓国ソウル特別市鍾路区にある、王宮の城門の遺構のことである。街中に歴史的な門が印象的であった。門前には歴史的な風貌の男性が数人立っており、記念撮影が出来た。中に入ると、建造物や門がいくつもあり、それらを見学することが出来た。とてもきれいで広く、よく歩いた。

### 明洞でショッピング

明洞は大分の湯布院のような歴史的な落ち着いた町だった。古びたお店もあれば、ショッピングモールもあり、しおりなどの買い物ができる。

### 夕食

夕食はソウルの学生が寮でサムギョプサルを手作りしてくれた。みんなで地下にある台所で豚肉を焼いてごはんを準備して、まっこりを飲みながら話した。日本語が話せる学生がいたため、通訳をしてくれながら、いろんな話が出来た。

私たちは寮はないので難しいけれど、県看でもお酒を飲みながら話せる機会があれば楽しかったのかなと感じた。また、深夜に私たちに手紙を作ってくれていた(最終日にもらった)。私達も急遽ファイルに油性ペンで寄せ書きをして作成したが、来年は日本から画用紙や色紙などの準備をしていっていた方がいいかなと思う。

助産学院生 K. Y

午前中は、ソウル大学病院の前にある昌徳宮という宮殿に行きました。この昌徳宮は韓国にある他の宮殿と違い、建物が南向きではなかったり宮殿に繋がる門が一つ少なく三つであるというような特徴がありました。また、門の柱を少しずらしてあって入口の部分を直線上にしないことで王様が外部から狙われないようにしていることを聞き、人々は様々な工夫をして王様を守っておりとても偉大な存在であったことを知りました。宮殿の敷地内はとても広く、川が流れていたり木が生い茂っていて自然に囲まれたところでした。日本にはないような雰囲気建物が印象的でした。

午後はソウル大学病院に行きました。一般病棟では、循環器内科と一般外科を見学させていただきました。循環器内科では、ナースステーションの前にテレビがありその画面で患者のモニター心電図を確認していました。血管系の病気が多く、ICU と連携している病棟でした。一般外科は、消化器や呼吸器などを合わせた一般的な外科病棟であると聞きました。この病棟では手術後の患者を担当し、入院時から退院までの患者教育はパンフレットを使用して行っていました。患者中心の看護を心がけ心理面のサポートにも力を入れていました。また、新人の看護師の教育をするための教育内容をまとめたファイルがあり、それを使用して統一した教育を行っていました。

次に、子ども病院を見学しました。外来の受付の近くには CD と書かれた窓口があり、そこで他の病院での患者の情報が入った CD の受け渡しをしていました。CD を使用して情報共有していることを知りました。また、説明看護師という役割の方がいる部屋がありました。そこではパソコンで子どもの病気について病態や症状、合併症などの説明をしていて、看護師が家族の気持ちを聞きながら子どもの病気を理解してもらうようにしていました。この説明看護師は子ども病院だけではなく一般病棟にもあると聞きました。日本にはこのような役割はないので、韓国では患者や家族により分かりやすく説明することに重点を置いているのかなと感じました。

最後に、がんセンターを見学しました。ここでは抗がん剤治療を主に行っており、入院して治療を行うことと、デイケアのように通いながら治療を行うことができる場所でした。外来にはがんの種類によってセンターが分かれており、医師・看護師・放射線技師など様々な医療従事者がチームで働いていました。また、がん教育センターというところにはがんの種類別のパンフレットが置いてあったり、電子掲示板で病気のことやストレス管理のことなど知りたい情報を患者が得られるようになっていました。病院内ではカルテやこのような掲示板など電子化が進んでいることを感じました。

夜は、フェアウェルパーティーがありました。ソウル大学の学長と初めてお会いしてお話したり、先生方も学生も勢揃いで食事ができました。今回の交流で学んだことや感じたことを発表し、改めてこのプログラムに参加できたことを嬉しく感じました。また、学生間では韓国と日本の看護についての話をしたり、関係のないことも話したりしてとても楽しい時間でした。

## 滞在 7 日目 (2014 年 8 月 23 日 (土))

---

今日は一日ソウルの観光をした。

午前はオリンピック公園に行った。人口一千万人以上の大都市ソウルで指折り数えられる緑の公園であるオリンピック公園は、1986 年アジア大会と 1988 年ソウルオリンピック開催を記念するために 1986 年に造られた。規模約 150 m<sup>2</sup>の公園には、ソウルオリンピックの当時、使用された 6 つの施設が今でもそのまま残っており、現在も各種スポーツイベントや公演、コンサート、あるいは市民の健康増進のための施設として使用されている。入場料は無料で多くの親子が公園を訪れていた。平和の門の前にある大きな広場にはローラースケートなどをする子供たちがたくさんいた。また、公園内外に設けられた散策路はジョギングコースとして市民に愛されている。私たちは 6 人乗りの自転車で散策路を一周した。大都会の中心に位置するにもかかわらず、自転車でも一周一時間かかってしまうほど公園は広くて驚いた。公園内には彫刻作品やミュージカル噴水、百濟時代初期の遺跡などもあり多機能な公園だと思った。

午後は北村 (BUKCHON) を訪れた。“ソウル都心のだ真ん中に、朝鮮王朝時代から時が止まってしまったような古きよき昔の街“として多くの観光客でにぎわっていた。皿回しとよく似ている、韓国の伝統的な芸を見ることが出来た。とてもユニークなパフォーマンスで、釘付けになってしまった。石垣を境に上の方には韓屋街があり、実際に住民たちが住んでいることに驚いた。街並みは昔の日本と似ていて、とても心地の良い街だった。よくドラマのロケ地として使われているようだ。あの有名な冬のソナタのロケ地でもあった。下の方には現代風のおしゃれなお店が立ち並び、多くのカップルがショッピングを楽しんでいた。

学部 3 年次生 M. N

## 滞在 8 日目 (2014 年 8 月 24 日 (日))

---

ついに大好きな仲間、楽しかった韓国にさようならを言う日が来てしまいました。一週間の滞在中、この日が来て欲しくないとみんなが思っていました。楽しく充実した時間はあっという間に過ぎ、本当に時の流れが早く感じる一週間でした。

今日は崔先生が選んでくださったお店でみんなで美味しいブランチをとってから空港へと向かいました。

インチョン空港までのバスでは、K-POP 音楽を楽しんだり、写真を撮ったり、楽しく話したり思い思いに楽しい時間を過ごしました。

空港では、SNU の学生からサプライズで寄せ書きをもらいました。紫の物を多く身に着けていた人には紫色の画用紙、お酒を飲むと顔が真っ赤になってしまう人には赤色の画用紙というように、本学の学生一人ずつのイメージの色の画用紙にメッセージが書かれていました。滞在中に撮った写真付きで、その写真を見ると楽しかったその時間がついさっきのことにように思い出され、メッセージを読んで思わず涙が出ました。

最後は空港までお見送りに来てくれた SNU の学生一人ずつとハグして別れました。みんなの姿が見えなくなるまで手を振り続けました。

この 8 日間で仲がかなり深まったため、別れは大変辛いものでした。しかしながらこれからも

SNS を通じて連絡を取り合うこと、きっとまた会うということを約束しました。ソウルの先進的な医療の中で看護師として働くことになる彼女たちと連絡を取り合うことは、楽しいだけでなく学びを得ることに繋がることでしょう。これからもいい関係を築いていきたいです。

たくさんのおみやげと一緒に8日間の学びを日本に持ち帰り、ソウルで私たちが学んできたことや大分では見ることのできないものについて本学の学生たちにも知ってもらいたいと思います。

この8日間は看護の知識面でも、友情の面でも、大きなものを得ることができました。このような素晴らしい機会を与えてくださった SNU の先生方や NHS の国際交流委員会の先生方をはじめとする、このプログラムに関わったすべての方に感謝しています。ありがとうございました。



学部3年次生 M.N

## 韓国の助産

---

今回、ソウル大学の大学院生とおはなしをする機会があった。お話してくださったのは、H. K さん、母性看護学の D1 であった。はじめにお互いの院生になった経緯を話した。K さんは看護師になって小児科で勤務をされていたそうで、その後母性看護に関心を持ち大学院に進学されたそうだった。現在は母性看護学の大学教員を目指しているとのことであった。私も助産を志した経緯を説明した。

また、お互いの研究テーマについて話をした。K さんは産後うつについて関心をもっており、健診時に産後うつのスクリーニングで調査を行う予定にしているとのことだった。

そして、韓国の助産について話をした。韓国では早期退院がすすめられており、正常産で児に問題がない場合、産後2～3日で退院となる。その後、別の施設にて児の管理と母体の回復のために入院し、児の世話の仕方などについて指導が行われる。しかし、民間の施設では自己負担額が高額であり、施設を利用できない母子も多い。そのため、昨年より、母子保健センターのような公的施設が建設された。施設利用の順番は、収入が低い者が優先的に利用することが出来る。この施設では助産師は勤務しておらず、熟練の看護師が公務員として勤務しているという事だった。

このことを受けて、韓国で早期退院が進められるなか、黄疸の発見が遅れるといった問題は生じていないのかが気になりだった。しかし、現在のところ、低体重の児など核黄疸のハイリスクとなる児は、児のみ入院を継続するなど配慮しているため問題は生じていないとのことだった。日本においても早期退院が進められているため、病院以外の施設でそれをサポートできる仕組みが必要であると感じた。一方で、助産師はその施設にいないという状況は、よりよい指導をする

には難しい状況であると感じた。効率よくケアを提供するために分担をするという韓国の方法は参考にしながらも、分担することで質が問われないように看護の質も大事にしていきたいと思った。今回話をすることが出来てよかった。今後も交流を続けていきたいと思う。

助産学院生 K.Y